

「道徳的諸価値への考えを深め、自己のよりよい生き方を求める道徳教育」
ー子どもが生活と道徳的諸価値を豊かにつなぐ道徳学習の展開ー

香川県小学校道徳教育研究会研究部

香川県小学校教育研究会道徳部会

1 研究主題について

令和4年度の夏季研修会（紙上発表）、冬季研修会、各支部からの報告をもとにした成果は以下の通りである。

1つ目の成果は、学校・地域・学級課題の解決を実現するような総合単元的道徳学習、小単元化による道徳学習、単時間道徳学習を組み込んだカリキュラム・マネジメントにより、子どもたちの思いや考えを把握しながら、さらに成長を促す支援ができたことである。

琴平町立象郷小学校では、日常の児童の様子や会話から今後必要と思われる道徳性を考え、発達段階や各教科等の特性を生かした単元計画を作成したことで、学校課題の解決に迫ることができた。特に、日頃からの丁寧な見取りや授業前のアンケートから目指す児童像を教員間で共有し、教科等横断的視点で教育活動を小単元化する等の視覚的にユニットとして見るようにしたことは効果的だったといえる。

高松市立庵治小学校では、道徳科と総合的な学習の時間のよさを生かし「考えては行い」「行っては考える」ことを繰り返すことができるような総合単元的道徳学習を行うことで、学校だけではなく地域課題にも迫ることができた。地域の特色を生かした課題を各学年で設定し、「庵治町の物や技術だけではなく『心』も受け継ぐものの一つとしたい」の思いのもと、ふるさと教材を用いて身近な題材から内容項目を取り扱ったことは効果的だった。特に、この実践では、庵治町の漁業と野網和三郎の偉業が内容面で一致していたことがとても有効であった。

三木町立田中小学校では、コミュニティスクールの強みを生かして地域住民・保護者等が、教育委員会・学校と責任を分かち合いながら仲間づくりや居場所づくりを実現することができた。自ら課題を解決しようとしたり、進んで活動しようとしたりする姿があまり見られないという実態に向き合い、重点目標を置き緻密な教育計画によって、家庭と保護者とつながった道徳学習（特に単時間道徳学習）を行ったことが効果的であった。

2つ目の成果は、主にICT機器の活用により、子どもたちに視覚的な支援ができ、多様な表現方法を保障することができたことである。三木町立氷上小学校では、心情を色で視覚化するツールを用いたり、共有ノートを用いたりすることで「きき合い、伝え合い、深く学び合う」授業づくりを行うことができた。また、丸亀市立垂水小学校では、「特別の教科 道徳」の新設に伴い情報モラルに関する扱いが「留意すること」から「充実すること」になったことに着目し、情報モラルの内容面から価値・教材分析を行うことで、情報化社会に生きる子どもたちの生活とつなげる実践を行うことができた。そして、坂出市立東部小学校では、多面的に価値を捉えられる発問とYチャートを用いることで、協働的な学びの実現の場をつくることができた。子どもたちが一人一人に与えられたICT機器を用いるだけでなく、共有する一つのものを使って考え、議論できるよさを見出すことができた。

一方で課題としては、「道徳の内容項目ごとに総合単元的道徳学習を用いることは、かなりの時間を要すること」「ICTの活用等の方法面だけではなく、さらに情報モラル等の内容面の整理も必要であること」が挙げられる。今後、カリキュラム・マネジメントと1時間の授業づくりの両側面から、より子どもの実態に合わせた価値・教材分析につながる価値構造の作成等の内容面や、各校の重点項目に焦点化して総合単元的道徳学習を作成する等の方法面の指導と評価を考えていくことで、主題に迫る子ども像を実現する道徳学習を見出していきたい。

そこで、本年度も引き続き、「令和の日本型教育」「香川県教育基本計画」を社会背景とし、以下の研究の柱を設定する。

- I 子どもが生活と道徳的諸価値を豊かにつなぎ、よりよい生き方を求めるカリキュラム・マネジメント
- II 子どもが生活と道徳的諸価値を豊かにつなぎ、考えを深める主体的・対話的な授業

【研究構想図】

【社会的背景】

- ①令和の日本型教育…多様化・情報化の中での「個別最適な学び」「協働的な学び」
- ②香川県教育基本計画…どこで生きようとも、郷土の発展に思いをはせ、自分の良さや可能性を見出し、夢と志を持って、生涯にわたって学び、歩み続ける人をめざす「ふるさと教育」の充実

自己のよりよい生き方を求める子どもを育成

「道徳的諸価値への考えを深め、自己のよりよい生き方を求める道徳教育」

ー子どもが生活と道徳的諸価値を豊かにつなぐ道徳学習の展開ー

方策イメージ図

I 子どもが生活と道徳的諸価値を豊かにつなぎ、よりよい生き方を求めるカリキュラム・マネジメント

II 子どもが生活と道徳的諸価値と豊かにつなぎ、考えを深める主体的・対話的な授業

【重点1】

学校・地域・学級の課題解決を目指した道徳学習の(小)単元化

・価値分析、教材分析、児童理解【重点2】

・主体的・対話的な学びを促す工夫

・学級経営の工夫

・ICTの活用

・郷土教材の活用【重点3】

※吹き出しは主に関連する項目と前年度実践

I (1) 総合単元的道徳学習 (2) 単時間道徳学習

【夏季研】

- ・総単（高松市立庵治小学校）
- ・小単元化（琴平町立象郷小学校）
（香川大学教育学部附属高松小学校）
- ・単時間（三木町立田中小学校）

【実践報告】

- ・総合、特活と関連付けた総単の必要性和重要性（高松支部）
- ・生活実態と価値をつないだ、自己の生き方を見つめる力を中心とした実践（仲善支部）

II (1) 価値分析、教材分析、児童理解 【実践報告】

- ・教材分析シートの活用による発問検討（丸亀支部）
- ・価値分析や教材分析を生かした授業づくり（坂・綾支部）
- ・教材分析シートや思考ツールを生かした授業づくり（小豆支部）
- ・主に児童の感想の生かし方、意図的指名等の授業づくり（さ東支部）

II (2) 主体的・対話的な学びを促す工夫

II (3) ICT機器（タブレット等）の効果的な活用

II (4) 主体的・対話的な学び方を学ぶ学級経営の工夫

【夏季研】

- ・ICT機器（三木町立氷上小学校）
- ・情報モラル（丸亀市立垂水小学校）
- ・思考ツール（坂出市立東部小学校）

【実践報告】

- ・児童の実態から生み出す問いや道徳ツールを用いた実践（三観支部）

II (5) 郷土資料「わたしたちのふるさと香川」の効果的な活用

【冬季研】

- ・教材「親孝行な観賢さん」指導略案等作成（高松支部）
- ・教材「生まれ変わった商店街」指導略案等作成（高松支部）
- ・発問のポイント、主体的・協働的な学びにするポイントについて教材分析シートを使った演習（小豆支部）

I 子どもが生活と道徳的諸価値を豊かにつなぎ、よりよい生き方を求めるカリキュラム・マネジメント

各学校においては、教科等の目標や内容を見通し、特に学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実することや、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。

学習指導要領では、総則第2の2において、以下のように述べられている。

- (1) 各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、④各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。
- (2) 各学校においては、児童や学校、地域の実態及び児童の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していくことができるよう、⑤各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする。
- （文中—記号・下線部は、筆者による）

また、教育課程を編成するにあたり、教科横断的な視点の考え方については、中教審答申では、「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標達成に必要な教育内容を組織的に配列していくこと」としている。このことは、現在の各教科等の関連を教師の「思い付き」で図るのではなく、学校教育目標がめざす資質・能力を育てるよう、意図的・組織的に関連を図る内容を計画的に配列しようとするものである。

さらに、道徳における教科横断的な視点として、専門家会議での平成28年7月22日「道徳教育に係る専門的会議・特別の強化・道徳の指導方法・評価について」の報告には、質の高い多様な指導方法として以下の内容が示されており、その概要は次の通りである。

- ・読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習
 - ①教材登場人物の判断や心情を自分との関わりにおいて、登場人物に自分を投影して道徳的価値の理解を深めることができる。
- ・問題解決的な学習
 - 児童生徒一人一人が生きる上で出会うようになる②道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができる。
- ・道徳的行為に関する体験的な学習
 - 役割演技などの体験的な学習を通じて、実際の問題場面で実感を伴って理解する等、生活の中で生じる③様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。

道徳科のカリキュラムにおいては、道徳教育の全体計画とその別様により学校教育目標やめざす子ども像から指導内容の重点化を図るとともに、「総合単元的道徳学習」あるいは「単時間道徳学習」で扱うといった、学習類型も検討し、年間指導計画に位置づけることが大切である。なお、本研究主題では、上記の④・①について「単時間道徳学習」、⑤・②・③について「総合単元的道徳学習」として、位置づけることにする。

(1) 総合単元的道徳学習（上記⑤・②・③）

要となる週に一度の道徳科の授業をよりよい時間とするためには、学校教育活動全体で行う道徳教育の充実が必要である。子どもたちは、日常的に道徳的諸価値に関わる学習活動や体験を行っているが、それをいかに生かすかが大切である。そのため、教師は意図的に学校の行事や体験、教科等の学習活動等をマネジメントし、道徳科の授業で考えが深まるように働きかけることが大切である。このような考えのもと、道徳科の授業を要とし各教科や特別活動、総合的な学習の時間等と関連をもたせ、意図的・計画的に行う総合単元的道徳学習が広く行われるようになった。特に、総合的な学習の時間と関連をもたせ、環境、福祉、人権といった社会の諸課題や地域の人々の暮らし、伝統や文化など地域の諸課題の解決をめざす道徳学習が定着されつつある。

この総合単元的道徳学習は、子どもの意識の流れを大切にした道徳学習ができるように、単元化を図って行わ

れるものである。単元化を図ることで、価値内容について多様な関連価値から深めることができる。単元内の他の道徳の時間に学んだ価値、総合的な学習の時間の体験を通して気付いた価値をつないで、自分の新たな価値観をつくることことができる。さらに、体験を結び、道徳的实践力をより高めることができる道徳学習である。

また、学級の課題等に応じた「短いスパン（小単元化）での総合単元的な道徳学習」も考えられる。「短いスパン（小単元化）での総合単元的な道徳学習」とは、道徳の授業の前後に行事や学活等の時間を3時間程度で設定し、単元化を図って行うものである。この小単元化の総合単元的道徳学習は、時数が少なく、子どもにとって価値と生活をつなげやすいことである。教師にとっては、より個に応じた指導と評価を行うことができ、子どもの個性や可能性を伸ばす状況をより生み出しやすくなると考える。例えば、基本的生活習慣や社会のルールへの定着及び悩みや心の揺れ、葛藤等の解決を目指し、生活の自立を促す学習が考えられる。特別活動と日常生活とを結んで、生活の基本に大きく関わる基本的生活習慣や社会のルールが価値として分かり、道徳的实践ができるようにすること、また、そこから自分の悩み等の解決方法が見出せるように単元を展開していく。つまり、小単元化の総合単元的道徳学習は、多様な生活様式の中での基本的生活習慣、規範により柔軟かつ包摂的に応えられる構想である。価値の認識と実生活での実践を繰り返す中で、自己評価をし、自分の価値観をつくり直していくことができると思う。

問題を持ち、見通しをもつ段階	調べ、考え、表現し、まとめる段階	つなぐ段階
総合的な学習の時間の探求課題から、自己を見つめ、問題を持ち、見通しをもつ。	教材により広い視野から多面的・多角的に → 例（生活事例）により、人間的な道徳的価値を探る。生活方について考えを深める。	学んだ道徳的諸価値を総合的な学習の時間につなぐ。

総合的な学習の時間と関連をもたせた総合単元的道徳学習のイメージ

問題を持ち、見通しをもつ段階	調べ、考え、表現し、まとめる段階	つなぐ段階
生活上の課題を見つめ、共通意識をもつ	生活事例の中で、課題 → 生活事例により、人間的な生活場面をつかむ。生活方について考えを深める。	主として、特別活動等につなぐ。

小単元化の総合単元的道徳学習のイメージ

(2) 単時間道徳学習（上記①・②）

総合単元的道徳学習は、意図的・計画的に行われる学校の教育活動とつなぐ学習である。しかし、子どもたちの生活は意図的・計画的に設定されている場だけではない。学校の休み時間や家庭や地域において子どもたちは様々な経験を積み重ね成長している。道徳の教材や価値内容によっては、そのような生活経験とつないでよりよい生活方についての考えを深める単時間道徳学習が効果的なことが多くある。

また、子どもの生活経験とつなぐことが難しい価値も考えられる。例えば、家庭や地域の実態によるが、内容項目であれば「国際理解、国際親善」「畏敬の念」「よりよく生きる喜び」等がこれにあたる。このような価値を単時間道徳学習で扱う。単時間道徳学習では、教科書教材を最大限に生かして、子どもの心に残る指導の工夫を考え、子どもが自ら内面を見つめ、道徳的心情や道徳的判断力を高めていく。

問題を持ち、見通しをもつ段階	調べ、考え、表現し、まとめる段階	つなぐ段階
教材についての読書活動・感想文等から、感じたことに問題を持ち、見通しをもつ。	文の読解、感じ方を交流し、価値についての → 見方・考え方の論理を深め、生活事例とつなぐ。見方・考え方を深める。	学習活動や自己の生活とつなぐ。

単時間道徳学習のイメージ

Ⅱ 子どもが生活と道徳的諸価値をつなぎ、考えを深める主体的・対話的な授業

子どもが生活と道徳的諸価値をつなぎ、考えを深める主体的・対話的な授業とは、道徳的価値の理解が自己のよりよい生き方につながっていくことである。自己のよりよい生き方につながぐためには、実感を伴う道徳的価値の理解が必要である。この実感を伴った道徳的価値の理解は、道徳的実践を通して根付いていく。そして、それは自信につながり、将来、困難な問題に出合ったとしても、その時の最適解を導き出す支えになるに違いない。ここでいう自信とは、例えば、児童の多面的・多角的な価値観を認められるような授業により「自分にもできそう」や「やってよかった」という思いがその一つである。小学校4年生で「寛容・相互理解」の価値理解をきっかけに、体育科での友達との関わりにおいて成功体験を得ることができた子どもは、今後の人間関係でも前向きに捉えていける。友達とのいざこざについて教材をもとに友達と議論することでスッキリできた授業そのものも支える経験となり得るだろう。この際、教師の意図的な声かけや朱書きによって支援していくことで、より質の高い実践の場となりやすい。きれいごとではなく、道徳的価値を知識としてもっているだけでなく、道徳的価値と自分の生活を乖離させない学習展開を意識する必要がある。

つまり、「生活と道徳的諸価値をつなぐ」ためには、子どもにとって価値をいかに自分事として捉えていけるかが大切になってくる。

(1) 価値分析、教材分析、児童理解

本研究会では、これまで「価値分析」と「教材分析」そして、「児童理解」を大切にしてきた。価値分析はこの主題で何をねらうかを明らかにするものである。学習指導要領の価値内容の解説を低・中・高合わせて、価値内容を研究対象とする。そして、他の価値の関連を考慮して、中心価値を考える。多様な価値観をもった子どもたちに対応するために価値内容を様々な視点から考えていく必要がある。子どもの実態（子どもがもっている価値観、道徳性の発達）、教育課題や学校課題からも考えていく。方法としては、中心となる道徳的価値に関わる文献、関連する教材、報道等を集め、教育目標、地域や家庭の願いを意識して捉えていくことである。

教材分析は、言葉を手がかりにそこから読み取れる多様な価値を教師は把握しておき、その繋がりを考えておく。教材中の道徳的価値に関わる表現を洗い出していくことである。書き込みにより、教師の資料への見方が明確になる。また、子どもの書き込みは、子どもの感じ方や道徳的価値の考え方を明らかにするものである。

授業の中で用いる教材においては、ねらいの設定、つまり、道徳授業の本質でもある価値内容の研究が、極めて重要となる。教師が指導する道徳的価値に対する深い理解をもち、指導に臨むことで、道徳的価値を実生活に生きて働く力に変えていくことができる。

教材分析を指導に生かすことについて、教材をねらいとの関わりで道徳的価値がどのように含まれているかについて検討していく。そして、登場人物の行為や心の動き、読み物教材に対する子どもの感じ方や考え方など分析し、どのようにすれば、子どもの学習意欲を高め、道徳的価値の理解を深めることができるかなどについて多面的に検証することが大切である。

子どもが教材と出合った時に、子どもの思考を考えると、授業をつくっていく時に、学習活動や展開を工夫することができる。そのためには、教材の構成を認識しておくことが不可欠となる。

児童理解とは、一人一人の個がもつ課題意識について考慮することである。価値内容として学んだことが生かされない実態については、この点について教師の押さえが弱いのではないかと考えられる。子どもの生活の文脈で価値構造を位置付けていく作業が必要となってくる。より子どもが自己の生き方への考えを深めることにつないでいくためには、教師がこの価値を子どもの言葉で言うとういう表現になるのか、実践した後に置き換えるとうなるかについて見通しをもって考慮しておく必要がある。

この価値分析、教材分析、児童理解を行うことは、1時間の道徳科の授業づくりのみならず、単元化を図る等のカリキュラム・マネジメントの充実にも共通する。

【各手順と具体例】

	価値分析	教材分析	児童理解
手順	<ul style="list-style-type: none"> ・関連する価値を含めて中心価値を主題から何をねらうかを明らかにする。 ・中心価値、関連価値について、子どもの実態や家庭の願い、学校課題と照らし合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉からと読み取れる多様な価値を把握して、つながりを見付ける。 ・子どもの感じ方や考え方を想定しておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの生活の文脈で価値構造を位置付けていく作業を行う。 ・子どもの発言や行動から道徳的価値における実態を把握する。
例	主題「生き物と共に生きる」 中心価値「生命の尊重」 関連価値「善悪の判断、自律、自由と責任」	「ごめんね、みなみ」と人間が捨てたゴミの誤飲で死んでしまったキリンに対する言葉から、動植物を自分事として考えることにふれられる。	生活科での野菜をお世話したことを通して、自然を大切にしたいという心情が養われている。毎日の水やりの際に言葉かけを行っている。

(2) 主体的、対話的な学びを促す工夫

主体的、対話的な学びを促すためには、考えたい、話し合いたくなる必然性を高める「問い」（課題）の設定が大切である。発達段階を考慮したときに、低学年の初期の段階から交流を重視した学習も不可能ではない。しかし、大切なのは、子どもが受け身になるのではなく、学習に対して能動的な参加を取り入れた教授・学習を行っていくことである。例えば、めあてを感想とつないでつくることや導入時に「〇〇な心」等と板書することで、学習内容から生活場面を焦点化しながら迫っていくことも考えられる。

また、「特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない」、「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育を養うべき基本的資質である」との答申を踏まえ、1時間の授業を構想する必要がある。

授業づくりは、授業中に行う教師の支援だけではなく、教材研究や価値分析も大切である。教材を教師がしっかりと読み、どのような中心価値が含まれている内容で、その中心価値にはどんな関連した価値があるのかを把握しておかなければならない。そして、子どもが主体的に対話的に学習が進められるように「問い」につながる発問を教師は準備しておく必要がある。中心となる発問だけではなく、補助的な発問やそこに至るまでのしかけ等、子どもの実態と姿を十分に想定しながら行っていくことで、深い学びへとつなげていく。

(3) ICT機器（タブレット等）の効果的な活用

令和の時代における学校「スタンダード」として、一人一台端末環境となった。文部科学省の方針の中には、ICT環境の整備は、目的ではなく、手段であることである。このような状況を、道徳の授業づくりに効果的に活用していきたい。授業の中で考えを示す場面であったり、共有する場面であったりしたとき、表現の選択肢が増える等、個々の差をなくしていくことが考えられる。「書くこと」や「話すこと」に偏った表現方法では、なかなか自分の思いを伝えられなかった子どもが選択や判断をするだけで物事を伝えられることが可能となる。もちろん、これまで行ってきたアナログでの良さと、これからの時代に求められるデジタルの可能性を適切に合わせしていく必要がある。

ICTを活用することで、道徳的価値と子どもの思考をつなぐことができる。その方法として、子どもの思考を可視化しやすい点が挙げられる。一人一台タブレット端末と教室に設置されている電子黒板をリンクさせて全体の考えが一つの場面に共有できるようにする。これまで、黒板とマグネットを用いて行っていた座標軸で自分の立場を表示する方法だけではなく、その立場に至った理由も提示することが可能となる。

ICTの活用により、より一人一人の価値観が表出されやすくなり、見方や考え方を広げていくことが考えられる。しかし、ここで大切にしたいのは、広げるだけではなくICT機器を子どもが活用することによって友達との価値観と自分の価値観の共通点や差異点に気づき、道徳的価値を理解し、学びを深めていくことである。

	デジタル	アナログ
導入場面	・アンケートフォームの活用することで、集計の作業をせずに結果を知ることができる。	・子どもの生の声で生活経験を聴き合うことができる。つぶやいた言葉から新たな話題が生まれることも期待できる。
展開場面	・座標軸での立場を明確化することとその理由を打ち込める。誰がどのようなことを考えて表現しているのかを知ることができる。	・座標軸を用いた議論を行う際には、立場を気軽に变えることは難しい。手動で教具を動かすため、操作と思考を繋げて考えることができる。
終末場面	・学んだことや感想を全体で共有しやすい。友達との考えを比較しやすい。自分で比較対象を選択できるという点においても個別化できる。	・書く活動や発表することを通して、個の思いを声で共有することができる。一つのものを介することで、視点を一つに対話することができる。

(4) 主体的、対話的な学び方を学ぶ学級経営の工夫

道徳科の時間のみならず、学習を支える大きな要素に学級の環境がある。すなわち教師が目指す学級経営が学級の風土を生み出し、子どもの見方や考え方の方向性を示す大きな要因となる。教師は、教師と子どもの、または子どもと子どもの、よりよい人間関係を育み、道徳教育の基盤となる確かな学級経営を目指さなければならない。授業で対話的な学び方を実現するためには、ともに学んでいく仲間との信頼関係が最も大切である。「意見は違うけれど、思いは分かる」というような他者理解が醸成された空間であれば、子どもたちは自ずと内面を表に表出していくだろう。

また、学習したことや学習しようとすることを視覚的な表現物として示し、常に子どもの意識の上にあるように物的環境を整えることも有効である。授業での学びを教室掲示として残したり、全校で取り組む道徳教育的な事柄について意識を啓発するような校内掲示をしたりすることである。掲示物を通して、意識を啓発したり、自分や友達の良さを実感し、成長を認め合ったりする。これは子どもだけではなく、その教室や学校を訪れる外部の人にも目にふれる。そのことは学校や地域社会の風土をつくることにもつながる。

(5) 郷土資料「わたしたちのふるさと香川」の効果的な活用

香川県郷土教材「わたしたちの ふるさと香川」とは、平成30年度より香川県の「ひと・もの・こと」を教材にしたもので、郷土の歴史ある事柄や先人の思いや願いにふれることができる教材である。そして、この教材は故郷となる香川県の知見を高め、郷土愛を育むことをねらいとしている。本年度は、改訂版を使用していく。改訂の主なポイントは、さぬきの「ひと・もの・こと」と題して、他教科・他領域とのつながりにおいて活用しやすくしたことである。また、教材を見直し、新教材を作成したことである。より地域を深めることができるよう子どもにとって身近で道徳的価値の理解を深めやすい内容にすることができた。

香川県では、香川県教育基本計画において教育理念を「郷土を愛し夢と志を持って自ら学び歩み続ける人づくり～自立・協働・創造を支える香川の教育～」と掲げている。さらに、「郷土香川の自然、伝統、文化、産業などへの理解を深めることで、子どもたちの郷土への愛着や誇りを育み、香川で育ったことを人生のゆるぎない礎として、どこで生きようとも、郷土の発展に思いをはせるとともに、人生100年時代を見据え、自分の良さや可能性を見出し、夢と志を持って、生涯にわたって学び、歩み続ける人を、学校をはじめ家庭や地域と連携・協力しながら育成していきます。」と述べている。このことを踏まえても郷土教材「わたしたちのふるさと香川」を用いて道徳的価値と子どもの郷土に対する理解を深めることは、有効であると考えられる。

社会情勢や子ども周囲を取り巻く環境の変化だけではなく、道徳教育の全体計画を立案するに当たり、子どもにとって身近であり、考えを深めていくことが重要である。その有効な手立てとして、郷土教材の活用が挙げられる。教科書教材と比較しながら、子どもの実態に応じて年間計画を作成することで、より子どもが主体的に学ぶことにつながると考える。学校行事や地域のイベントと照らし合わせながら、進め方について具体的に示し、

教職員の共通理解を図ることが大切である。

特に、生命や自然、伝統をはじめとする先人から学ぶ道徳的諸価値を含む内容に関しては、郷土教材「わたしたちのふるさと香川」に多く取り扱われている。香川県での実際に起こった出来事をもとに作成されているため、子どもが身近に感じながら考えを深めていきやすい。また、学校によっては実際にその場所や人が近くに存在し、実際につながることで本物と関わりながら学習を進めていくことも考えられる。教材性と地域性を活用していくことで、子どもが連続して「問い」と「気づき」を求めていけることにつながるのである。本年度の実践を基に、今後も、新たな教材開発も念頭に置いて進めていきたい。

○おわりに

これまで述べてきたように、本年度は2つの柱をもとに、研究主題に迫ることを取り組んでいきたい。本研究会がこれまで大切にしてきた道徳的価値と子どもの生活を一体として捉えることを大切にし、目の前の子どもの変容を姿とノート等の表現物を比較し、事実を成長と捉えて研究の検証を行っていく。予測が困難と言われている時代であっても、道徳的価値の理解を支えとし、自ら多様性を認めながら個性を発揮し、しっかりと判断していき、人生を歩んでいける子どもの育成を目指していく。より本研究会の道德教育を充実させるためにも、夏季研修会、冬季研修会、若年研修会等での県下の先生方による実践を分析し研究の方向性を見据えていきたい。